

徳島大学

徳島大学

I. 実施報告

(1) 実施責任者報告

徳島大学大学開放実践センター長 高瀬 昭治

1. 放送公開講座の大学における位置づけと、放送局その他の関係機関との協力関係について

四国地区の7国立大学では、昭和61年度から四国地区全域を対象に、大学の教育、研究の成果を広く地域社会に開放する事業の一環として、テレビ放送を利用した大学公開講座を共同で実施してきた。さらに平成2年度からは、テレビ放送と平行して、ラジオ放送による大学公開講座も開始された。共同の実施体制としては、四国地区国立大学学長会議のもとに同地区国立大学放送公開講座検討委員会が設置されているが、同検討委員会のもとで、7大学の中から輪番制で、その年度の放送公開講座の運営、実施にあたる大学を実施大学に決め、他大学はこれに協力する体制をとってきた。

平成2年度の実施大学である徳島大学では、大学開放のための学内共同施設である「大学開放実践センター」が全体の運営と実施にあたった。同センターの「運営委員会」(5学部、教養部、2短期大学部などから選出された運営委員とセンター教官で構成)が、テレビ、ラジオ両講座の基本テーマならびに主任講師を決定し、それぞれ主任講師のものに「放送公開講座専門委員会」を組織した。専門委員会は、出演講師ならびに広報・テキスト作成・調査などを担当する専門委員を選び、13回の講座内容を決定した。

次に、番組を制作する放送局との関係については、基本テーマ設定の途中から放送局側に大学の意向を伝え、テーマについての理解と協力関係を深めた。さらに、専門委員会で各回の講座内容を詰めていく過程では、担当講師と局側との意見交換が何度も繰り返された。局側からは番組構成、放送素材などについて有益な意見が出され、講師陣は、それらを参考にしながら効率よりテキストの作成にあたった。

最後に、四国地区では、放送公開講座の実施を四国4県の全域に周知させるため、当初から、4県の県教育委員会に後援を依頼するとともに、各県ごとにマスメディアへの広報活動を展開してきた。また、今回は生命科学というテーマからみて、各種医療機関、農業団体などにも受講の協力を依頼した。

2. テーマの選定と、そのねらいについて

(1) テレビ講座『未来をひらく生命科学/その基礎と応用』

1950年代の分子生物学の発展を基礎に、最近の遺伝子工学、細胞工学、たんぱく質工学などの進歩はめざましく、私たちの健康・医療をはじめ、日常生活にも大きく役立っており、その将来の展開が注目されている。さいわい、本学におけるすぐれた研究分野の一つに、医学部を

中心とした生命科学の基礎研究と応用領域があり、本学の特長も出せるということで、この生命科学をテーマに選定した。

この講座では、一般には理解しにくい生命科学の基礎理論を平易に解説するとともに、人びとの関心の深い生命科学の最新のトピックスを紹介し、この分野における今後の応用分野と課題を明らかにすることを、ねらいとした。

(2) ラジオ講座『四国の文学』

私たちは、地元四国に関係のある文学や文学者について、知っているようで意外に知らない。文学に親しむとともに、ふるさとを知るという意味から、もっと四国の文学作品や作家を身近に感じ、考え直すことが大切だと考え、このテーマを選んだ。四国四県に関係のある文学作品や作家を、古典から現代に至るまで体系的に紹介するとともに、文学碑や記念館などを訪ねながら、地域と密着したかたちで、文学の楽しさを味わってもらうことをねらった。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

テレビによる自宅での学習は、どうしても講師による一方的な講義になりがちである。したがって、学習効果を高めるためには、予習・復習を助ける印刷教材と、教室でのスクーリングが欠かせない。印刷教材の役割について、1) 予習・復習のための学習教材である、2) 最新のトピックスを紹介する、3) 放送内容と相互補完的である、4) もっと学びたい受講生に、将来の学習指針を示す、の4点を重視した。

四国地区でのスクーリングは、会場が4県各地に及ぶため、放送終了後に1回しか開催できないのが現状である。こうした学習指導の不足を補うため、放送期間中に4回、『TV 講座通信』というパンフレットを発行した。講座やテキストの内容についての質問、講座に関連ある講演会、出版物、放送番組など各種情報の紹介、講座に対する受講生の感想・意見などを収録した「学習補助情報」である。受講生と番組、講師との間、あるいは受講生同士の間を結ぶネットワークとして、もう一つのスクーリングの役割を果たした。なお、この『通信』は郵送費がかさむため、徳島県内の受講生に対してしか発行できなかった。

4. 番組の学習効果について

受講生のアンケート調査の結果がまとまっていないので、まだ何ともコメントできないが、テレビ講座の世帯視聴率調査で見ると、早朝6時からの放送にもかかわらず、徳島2.1%、香川1.0%、愛媛0.8%、高知1.5%と、予想以上の視聴率を上げていることがわかった。また、7学習指導会場における受講生の質問や発言から類推すると、放送公開講座に対する受講生の熱意や期待の強さが十分うかがわれた。

5. 印刷教材の作成過程について

放送公開講座における印刷教材の重要性については、担当講師は十分認識していたが、医学部などの多忙な教官にとっては、原稿執筆、校正などにさかれる時間が問題であった。放送公開講座専門委員会では、テキスト作成が講師に過大な負担を課すことのないよう、簡潔なものにすることを確認し合っていたが、結果は、充実した内容のものにならざるをえず、負担をか

けることになった。また、原稿の督促や印刷所との折衝にあたった開放実践センターの教官、事務官の雑務負担も大きかった。ただ、講座の企画と内容決定を早い時期に行なったため、執筆時間を十分取ることができたのは幸いであった。

6. 学習指導の実施状況について

(実施日時・会場・出席者数・出席率)

| テレビ講座 | | 第 1 回 | | | 第 2 回 | | | |
|-------|------|--------------|------|------|-------------|--------|-------------|------|
| | 実施日 | 平成3年1月27日(日) | | | 平成3年2月3日(日) | | | |
| | 会場 | 徳島大学 | 香川大学 | 愛媛大学 | 鳴門教育大学 | 香川医科大学 | 新居浜工業高等専門学校 | 高知大学 |
| | 出席者数 | 57名 | 26名 | 40名 | 15名 | 14名 | 13名 | 28名 |

(実施日時・会場・出席者数・出席率)

| ラジオ講座 | | 第 1 回 | | | 第 2 回 | | | |
|-------|------|--------------|------|------|-------------|--------|-------------|------|
| | 実施日 | 平成3年1月27日(日) | | | 平成3年2月3日(日) | | | |
| | 会場 | 徳島大学 | 香川大学 | 愛媛大学 | 鳴門教育大学 | 香川医科大学 | 新居浜工業高等専門学校 | 高知大学 |
| | 出席者数 | 41名 | 29名 | 33名 | 9名 | 1名 | 11名 | 20名 |

| 講座の種別 | 出席者数 | 出席率 |
|-------|------|-------|
| テレビ講座 | 193名 | 21.1% |
| ラジオ講座 | 144名 | 20.7% |
| 総計 | 337名 | 20.9% |

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

放送公開講座の実施、運営は、本学では評議会の決定に基づいて、「大学開放実践センター」の事業の一環として行なわれている。このセンターは、1986年、生涯学習社会の形成という立場から、大学教育の成果を広く地域社会に開放するための実践活動と調査研究を行う施設として設置された。実践面では、今年度は年間41講座の公開講座を開講し、1360名の受講生を集めている。

放送公開講座の実施は、こうした一般の公開講座とは異なり、キャンパスに來れない遠隔地の人びとの生涯学習のあり方を考える、貴重なきっかけを与えてくれた。その意味では、放送を利用した生涯教育の研究としても、きわめて有益であった。また、番組に出演した講師の立場から見ると、大学生とは違った一般成人を対象に、電波メディアの特長を生かした新しい教育方法を身につける、絶好のチャンスを与えられたことになる。放送公開講座は、とすれば硬直しがちな大学教育に新風を吹き込んだといえよう。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

テレビ講座『未来をひらく生命科学』では、生命科学の最先端のさまざまな研究領域が、26

名の専門講師により分かり易く解説されている。したがって、そのビデオは、医学部学生をはじめコ・メディカル（医療協力者）の学生を対象とした授業に、早速活用されている。一般に理解しにくい基礎理論や最新のトピックスが、分かりやすい映像によって提供されているので、学生の関心も高く、熱心に受講しており好評を博している。

ラジオ講座『四国の文学』も、文科系の学部学生の授業に、すでに一部が活用されており、今後さらに一般教育の分野でも利用が検討されている。また、テレビ、ラジオともに、それぞれ印刷教材が、最新の研究成果や情報を盛り込んだダイジェスト的な教科書として、学部の授業に積極的に利用されている。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

四国地区の放送公開講座の実施大学として、今回、初めて講座の企画、運営にあたったが、そこで当面したいくつかの問題点を列記し、今後の課題としたい。

1) 輪番制で7年に1回、実施大学になる現行システムの下では、最初は、どうしても大学の得意の分野がテーマに選ばれ、多くの教官が参加して講師陣を構成することになりがちである。テレビ講座『未来をひらく生命科学』では、26人の講師陣が出演し、番組1回分の平均出演講師数は2.6人であった。講義内容は、最近のトピックスを紹介し、きわめて内容豊かなものになった。その半面、受講生にとっては、番組展開のテンポが早く、じっくり考える余裕が少ないという印象を与えた。

2) ラジオ講座『四国の文学』は、特定の二人の講師が毎回出演するという構成だったので、番組全体の統一は十分に保たれた。他方、テーマが4県に広がり、内容、素材も豊富だったので、30分の放送時間は、あっという間に過ぎ、受講生から「もっと放送時間を長くしてほしい」という要望が出された。その意味では、1)の問題も含め、今後の課題としては、内容や素材をもっと整理して、特定のテーマについて、じっくり講義するスタイルを考える必要がある。

3) 四国全域という広範囲な地域を対象にするため、学習指導は放送終了後に、修了式を兼ね一度しか実施出来ないのが現状である。それを補うため、今回、学習補助情報として『テレビ講座通信』を発行したが、今後の課題としては、講座と受講生とのコミュニケーションを深め、学習効果を高めるために、学習指導をせめて2回ぐらい開催できる体制整備が求められよう。

4) 放送公開講座の実施の中心となった大学開放実践センターの存在は、この事業を円滑に進めていくうえで後方支援的な役割を十分果たし、きわめて有効であった。センター所属の教官、事務官の努力により、番組講師となられた教官は、印刷教材の編集、調査活動などの業務や雑用から開放された。一方、開放実践センターとしては、放送公開講座を担当したことにより、放送利用の生涯教育についてのノウハウを学ぶことができ、大学開放の新たな方法について理解と経験を深めることができた。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 未来をひらく生命科学

主任講師：酵素科学研究センター長 勝沼 信彦

生命科学という今日的、かつアトラクティブなテーマを選んだが、考えてみると、その内容はきわめて広範にわたるため、具体的にどういう素材を選んで13回の講座を組み立てるべきか、まず、全体の構成に苦心した。そこで、この分野における徳島大学の研究体制などを考慮して、全体を、1) 生命科学の基礎理論、2) 健康維持と生命科学、3) 病気と生命科学、4) 産業と生命科学、の4部に分けて構成した。結果から見ると、この構成は、医学における最新のトピックスや医療技術の応用面にウエイトが傾きすぎたきらいがあるかもしれない。ここには、基礎部門を担当する理学部が存在しないという本学の学部構成が反映されているわけで、やむをえないと思われる。だが、たとえば、分子生物学、遺伝学、細胞生理学、生化学などの基礎理論をめぐって、生命体の情報伝達や認識の仕組み、また代謝調節のメカニズムなど、生命をめぐる基礎理論の分野がもっと深められれば、さらに、この講座に、学問体系的な重厚さが加わることになったと思われる。

生命科学というテーマを取り上げるに当たって、公開講座の講師としては、高卒以上という受講生の水準を考えながらも、できるだけ最新の情報を提供するとともに、学問的なレベルは落とさないという、二重の配慮を行なった。最新の話題を取り上げるという点では、幸い、この5年間、この分野では、アルツハイマー症やAIDSなどの研究が大幅に進展し、さまざまな新知見を得ることができた。その意味では、今回、生命科学というテーマを取り上げたことは、きわめてタイミングがよかったといえる。

一般の人びとにも分かりやすく、かつ学問的なレベルは落とさないとなると、講義内容の作成にかなり苦労した。それには、複雑な数式や基礎データはできるだけ使わないようにする半面、具体例をできるだけたくさん紹介するように努めた。それによって、生命科学の研究領域の広さや、そこで使われている方法論や手法、さらに、その成果や到達点、残された課題などについて、理解を深めてもらうことをねらった。結果的に見ると、自然科学にあまりなじみのない高卒程度の受講生には、内容が多少むずかしく、とっつきにくかったかと思われるが、生命科学の全体像についてダイジェスト的な知識を得てもらうという意味で、この講座は、一般の人びとの生命科学へのいざない、導入という役割を十分果たしたものと信じる。

生命科学への導入に果たす役割は、この講座のビデオが、医・歯・薬学部学生やコ・メディカル（医療共同従事者）学生の教育面で、しばしば活用されていることで証明されている。その際、講座のテキストも紹介され、多くの学生が参考書として利用している。それも、テキストが基礎、応用の両面において最新の話題を取り入れ、生命科学の全体像を初心者にも分かりやすく体系的に解説しているからだと思う。

当初、放送公開講座の主任講師を引き受けたとき、テレビ放送の企画、構成、テキスト作成、出演という未経験の仕事だけに、これは大変なことになるのではと危惧したが、幸い、各学部にあたる多数の教官が多忙にもかかわらず、快く協力してくれたので、その不安は解消した。

それにしても、早い時期にこの事業に着手し、関係者に計画の全容を示し、その上で、ゆっくりしたスケジュールを立て、それに従って早め早めに作業を進めていったことが、この事業を円滑に進めるのに大いに役立ったといえる。また、計画の立案、放送局との交渉をはじめ、テキスト作成やスクーリングの実施に伴うさまざまな業務、さらに各種の調査活動などを、大学開放実践センターの教官や事務官が担当し、手際よく処理してくれたことも、番組担当講師の負担を予想以上に軽くするのに貢献した。

（ラジオ科目） 四国の文学

主任講師：徳島大学総合科学部教授 本多 浩

平成2年度の四国地区放送公開講座「四国の文学」を担当して思うことを述べてみたい。

四国地区ではラジオは初めてであったので企画段階で手探りの状態であった。平成2年度に予算がつく、ということで早い時期から企画を具体化することが困難であった。たまたま私が開放実践センターの運営委員の一人であったので個人的に予算のついた場合にどのようなテーマであるかということは頭の中で考え四国四県に関わる文学を文学散歩的に構成してみようとしていた。

予算がついてから私の頭の中での企画を具体化するには時間的余裕はなく、他大学と協同制作することをあきらめた。このようなテーマの場合、四県の大学で協同で行うのが望ましいことは言うまでもないが、その主旨説明、そして全員が一堂に集まり討議することが不可能であり、この点問題が残った。すくなくとも四国四県に放送するのであるから今後はテーマによっては予算のつくつかないを別にして、すくなくとも一年前ぐらいからはじめておく必要があると思う。

今回は私と仙波助教授を中心に学内の国文学者の協力をえて企画を具体化した。

さて文学散歩的に構成しようとしたので各地の文学碑等を訪ねたが、これも時間的余裕がなく、多くの人に協力をえた。資料蒐集、写真撮影（テキストのため）にも表面にでない協力者をお願いした。こうした人々の協力がなければできなかったとそれらの人々に感謝したい。そのため文学碑等の所在地などテキストに明示できなかったのは残念である。

テキストの執筆時間も短かすぎた。取り上げたい作品があっても、その作品を読むことができず割愛しなければならなかった。

とにかく時間がなかった。録音もテキスト執筆にも余裕がなかった。あらためて企画からテキスト執筆、録音まで余裕のあるように今後はできるように事務的に考慮して欲しい。

番組制作については私たちの意見をほぼ四国放送が具体化してもらえたと思っている。できることなら放送局側と企画段階からよりよく受講生に分かりやすくするためにはどのようにしたらいいか十分に討議したならばと思う。幸いに四国放送と私はいろいろな面で関係があり、仙波助教授もテレビ、ラジオに出演した経験があるので録音等はスムーズにできた。相手役の人、初対面ではなく気心が知れていたのもやりやすかった。放送局と大学が協同できた点は有難かった。

ともかく時間がなかったことが一番悔やまれることである。それに取材費としてどのていど

徳 島 大 学

使えるか、テキストにどのていど写真等を使えるのか、予算面で知らされている方がやりやすい。また放送局としても、どの程度制作に予算を使えるのか、それによりこちらからの注文もできるので、今後はそうした点を留意されたい。

II. 制作報告

(1) 制作責任者報告

四国放送報道制作局第1制作部長 胡田 俊一

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

四国で5回目を迎えるテレビ公開講座番組であるが、わが社としては初めての本格的な科学医学番組であった。制作にたずさわる講師全員と第1回の会合を持ったのは平成元年10月初旬、この時感じたことは専門用語の難解なことである。制作の基本方針は講師の希望や要望に沿って番組を進めるということだが、難解な用語を解り易くして欲しいというのが制作スタッフの希望であった。講師側に協力を要請、これには講師の先生方の並々ならぬ協力があった。制作は平成2年5月中旬開始ということで、担当者と講師の打ち合わせは平成元年12月末以降毎週のように行い、その過程での取材も民間の酒造会社、薬品製造会社、高知、高松の大学研究室などの協力を得て進められた。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

番組の企画テーマについては、大学開放実践センターが中心となって決定したものであるが、「生命科学」という未来指向の大きなテーマであっただけに構成及び制作の上でそれを如何に具体化するかが制作者側の命題となった。番組の進行上多くの図形が使用されたが、なるべく一目で解るものに近づけようと考えて図形や表をつくった。また実際に映像化できるものは、取材をするという方針で京都、神戸、高松、高知など広範囲にわたってVTR取材を行った。特色としては「生命科学」の指向するものを伝え、なお現在大きな社会問題となっている医学倫理まで触れ、その将来に一石を投じたことである。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

四国地区国立大学放送公開講座の放送期間中の視聴率は以下の通りである。

第3回 生体機能 10月20日(土) 午前6:00～6:45放送

| 視聴 平均 世帯 率 % | 番組 占拠 率 % | 個 人 全 体 | 男 全体 (20才 ～) | 女 全体 (20才 ～) | 職 業 別 視 聴 率 | | | | | | |
|--------------------------|--------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|-------------|-------------|----------------------------|------------------|-----------------------|-------------|-----------------------|
| | | | | | 事 務 職 | 労 務 職 | 商 工 ・ 自 営 業 | 自 由 職 業 | サ ー ビ ス 業 | 有 職 者 | 主 家 庭 婦 人 |
| 2.1 | 20.6 | 0.6 | 1.1 | 0.6 | 0.3 | 2.1 | 0.7 | 0.2 | 0.8 | 0.3 | |

当初、受講申込みは定員（500人）を大幅に越え、その倍近くあったと聞く。「生命科学」という非常に現代的なテーマが人々にアピールし、事前PRも行き届いたものと思われる。

内容的には、少々難解な部分もあり、番組としてこなしきれなかったものもある。したがって、視聴者にとっては、ついていくのに精いっぱいという意見も多かった。

しかし、全体としては全く専門的な分野をより身近なものとしたこと、テレビが大学と地域の人たちを結ぶ窓口たり得たことの意義は大きい。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

制作実施の問題は、講師のスケジュール先行ということで、時間の無駄を感じた。それともっと基本的な問題であるが、テーマ設定の段階から制作者側の意見も聞いて欲しかった。

今後は、講師の方々にテレビというものをもっと知って欲しいということである。講師がテレビ映像をどれだけうまく利用できるか、それが今後制作していく上での課題であることを強く感じた。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：四国放送報道制作局第一制作部 岸 佳克

四国地区での大学公開講座がスタートして5年、四国放送としては今回が初めての制作であった。他の番組の制作スケジュールとの関係で、制作には第一制作部の4人が当たることになった。したがって、これは1/4の意見とお考えいただきたい。

平成2年10月からの放送であったが、実質的な制作段階のスタートはそのおよそ1年前、平成元年10月であった。最初に今回のテーマが「生命科学」になったと聞いたとき、これは一体どうなるのか、どうすれば視聴者に解り易く、見やすい番組ができるのだろうか、という思いでいっぱいであった。めったやたらと扱えるテーマではないので、スタッフ一同心して取り組みつつもりであるが、制作過程を通して、そして放送を終えて、やはりその思いを引きずったまま終わってしまったかなという気がする。ちょうどNHKの「驚異の小宇宙・人体」が終わった後で、制作後、スタッフすべての面で比べるべくもないが、私個人としてはその非力さを思い、悩んだ1年でもあった。

しかし、その制作過程で新しい経験もあった。講師の先生方との出会い、これまで付き合うことのなかった新しいタイプの人々であった。また、生まれて初めて入る手術室。無機質な手術室、手術台、さまざまな最新機器、その中で人間の息づく生命力が感じられた。

常に何かを学びたい、学んでいたい、この思いは私たちが生きている限り尽きることはない。私自身の思いでもあり、地域に住む人たちすべての思いでもある。番組を作るということは、その何かを発見し、その番組を視てくれるであろう人たちと共に学ぶことにあると思う。私にとって今回の経験は新しい番組作りの出発点ではなかったかと思う。平成4年には再び四国地区国立大学放送公開講座を制作できる予定である。今回の大いなる反省点を糧に新たな番組作りに挑戦したいと思う。

制作報告（ラジオ科目）

（1）制作責任者報告

四国放送編成制作部長 藤井 徹二

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

（1）四国に関係のある文学作品、文学者を、その地域と密着させて、紹介、解説する。

（2）（1）を達成するため

（a）テキスト段階から、大学側と、会議を重ね、双方の理解を深めた。

（b）対談形式、朗読を配した。

（c）必要に応じて取材する。

（d）とにかく、判りやすい番組作りを主眼とした。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

（1）番組の企画は、徳島大学側で決定していた。

（2）局側では、制作上の工夫に努力する。

（a）4名のディレクターを配し、それぞれに創意工夫した。

（b）進行役は、平木彰子・元四国放送アナウンサーに依頼、大学側担当先生方に、好評でした。

（c）効果音を探し、番組に生かすようつとめた。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

受講生は、一般聴取者にも、分かり易い、親しみの持てる番組であったとの好意的評価もあり、聴取率は、年一回の調査のため未調査。同時時間帯の過去のデータは

日曜日 AM 6:30～7:00

'89.6.4(日) おはよう健康です 1.6%

'90.5.20(日) 浪曲名作選 0.7%

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

（1）テキストの完成から放送までの時間が短く、準備時間が短かった。

（2）局側の出来ることは、制作上の工夫のみで、内容は完全に大学側にあり、従って担当の先生方にラジオ放送を理解してもらうよう努めた。

（3）「四国の文学」という、親しみの持てる、ラジオに適したテーマで良かったと思うが、テーマによっては、ラジオに適さないものもあるのでは……。

テーマの決定は、局側にも相談が必要と思う。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：四国放送編成制作部部長代理 大島 和典

テキストの「あとがき」にもあるように『文学散歩ふうな内容の番組にしよう』という企画意図に沿った形で放送したわけだが、テキストの内容はかなり豊富で当然のことながら30分の放送枠で取り上げることが出来る題材は極めて限定されることとなった。

そこで

- ① リスナー（聴講者）が気軽に出席したり、身近に見つけることが出来る「場所」や「文学碑」などにまつわる作品や作家を中心的に取り上げる
- ② 多岐にわたる題材の中、担当の先生が特に興味や個人的感慨を持っている作品、作家を取り上げる

などで放送題材を決定した。

また、制作に当たっては

- ① 出来る限り「場所」「文学碑」など現場に立ってのリポートを入れるようにした
- ② 内容に変化を持たせるためにも効果音や作品にちなんだ曲を使うようにした
- ③ かなり自由に朗読を使うようにした（勿論、著作権問題をクリアしてのことだが）

その結果、リスナーや講師からも好評を得ることが出来たがテキストに「音」「話」で迫る作業としてはやはり手抜き感がつきまとった。

我社では、このシリーズが始まって間もなくの11月に「阿波公方＝足利尊氏の子孫で阿波に住んだ公方のこと」の遺跡をラジオでの解説を聴きながら巡る、いわゆるラジオ・ウォークを行ったがこの手法こそ「四国の文学」の放送化に適したものであったと思った。

いずれにしても地元で馴染み深い文学がテーマだけに制作者、講師ともに制作の過程を楽しんだシリーズだったことを付記しておきたい。

III. 講座の概要

◎ 科目の概要

| 科目名 | 中心的なテーマ | 科目のねらい | 内容・方法 | 放送曜日・時間・期間 |
|------------------------------|---|--|--|--|
| 未来をひらく生命科学—その基礎と応用— (テレビ) | <p>生命科学の歴史は新しい。1950年代の分子生物学の急展開を母体に遺伝子工学、細胞工学、タンパク質工学の肉付けにより、きわめて短期間に現代科学の最先端に踊り出た新しい研究領域として国際的な注目を集めている。同時にその技術は、バイオテクノロジーの成果という形で各分野に応用され、日常生活のあらゆる面に役立っている。</p> <p>本講座の中心テーマは、一般に理解しにくい生命科学の基礎理論を平易に解説し、いま問題になっているトピックスの現状を示し、更に、今後の応用分野の広がり、未来像を含め具体的、かつ、体系的に示すことにある。</p> | <p>生命科学の一つの特徴は、カバーする領域が非常に広いことである。分子生物学、遺伝学、細胞生理学、生化学などの基礎研究分野をはじめ、健康、医療、薬品、食品、農業、再生可能なエネルギー産出、地球環境の保全問題など広範な応用分野が広がっている。他面、遺伝子工学、細胞工学や先端医療技術は、生命倫理という新たな課題も派生してきている。</p> <p>もう一つの特徴は、生命科学の研究開発が日進月歩で進んでおり、日常生活に深く入りこんでいることである。しかも一般社会人が、その発展に追いつき理解するのは、きわめてむずかしい現状にある。</p> <p>したがって、本講座では、まず最初に、一般に理解しやすいように、タンパク質、遺伝、細胞構築、生体機能など生命活動の基礎理論を提示し、総合的に解説する。次に、人体の正常機能としての健康と異常機能としての病態とを取りあげ、これに対処する最先端の医</p> | <p>生命科学の理論と応用についてIからIVの四つの分野に分けて問題点に迫る。</p> <p>Iは生命科学基礎論であり、第1回は生命科学全般の概説につづいて、タンパク質の役割を取りあげる。第2回は遺伝のしくみとDNA、RNAの働き、第3回は生体機能における細胞と代謝の役割についてそれぞれ解説する。</p> <p>IIは健康と生命科学との関わりを考える。第4回は望ましい食生活を考え、第5回は運動、睡眠、環境問題を取りあげる。第6回は高齢化に伴う歯骨、血管、脳機能の老化について解説する。</p> <p>IIIは病気と生命科学との関わりを考える。第7回は免疫異常、アレルギー疾患、エイズなど、第8回は発癌のしくみ、成人T細胞白血病、肺癌について解説する。第9回は遺伝子診断、臓器移植など最新の話題を取りあげる。</p> <p>IVは産業と生命科学との関わりを考える。第10回は概説につづいて、医薬品の作用と生</p> | <p>四国放送 (徳島県) 毎週土曜日 午前 6時00分) 午前 6時45分 平成2年 10月6日) 12月29日</p> |
| | | | | <p>西日本放送 (香川県) 毎週日曜日 午前 6時00分) 午前 6時45分 平成2年 10月7日) 12月30日</p> |
| | | | | <p>南海放送 (愛媛県) 毎週土曜日 午前 6時00分) 午前 6時45分 平成2年 10月6日) 12月29日</p> |

| | | | | |
|----------------|---|---|---|--|
| | | <p>療技術を紹介する。</p> <p>最後に農業と工業における有用生物の利用法及び社会的倫理問題としての生命、倫理について考える。</p> <p>こうした構成から分かるように、本講座のねらいは、まず第1に難解だといわれる生命科学の基礎理論と広範多岐にわたる応用分野を、体系的な解説と視聴覚的方法により平易に理解させることにある。次に、その理解を通して、生命科学が現在及び将来の生活にどのような役割を果たすかを、受講生に正しく学びとらせることにある。</p> | <p>産の仕組み、硬組織と新素材などについて解説、第11回は有用生物を取りあげ、細胞工学的技術や農学分野における利用を考える。第12回は将来のエネルギー問題解決に向けての基礎研究を中心に、地球環境問題にも言及する。</p> <p>最終回では、生命科学の評価をはじめ、生命倫理問題に見られる新たな課題を含め、その未来像について、座談会形式で全体のまとめを行う。</p> | <p>高知放送 (高知県) 毎週土曜日 午前 5時45分) 午前 6時30分 平成2年 10月6日) 12月29日</p> |
| 四国の文学 (ラジオ) | <p>文学作品と、それを生み出した風土との関係は、切り離すことはできないほど深く結びついている。四国地方も例外ではなく、上代の記紀万葉から現代文学にいたるまで、この土地にゆかりのある文学作品や作家を、数多く生み出している。</p> <p>本講座の中心テーマは、そうした四国の風土と切り離せない数々の作品と、その作家を取りあげ、風土との結びつきを分かりやすく解明するとともに、作品そのものを楽しく鑑賞することによって、文学をいっそう身近に親しませることにある。</p> | <p>文学は必ずしも、それが描かれた土地を訪ねなければ分らないというものではない。しかし、『奥の細道』をたどる旅がブームを引き起こしたように、文学に描かれた舞台を訪ねることにより、私たちは作品やその作家に、活字の世界を越えたいっそうの親しみを覚え、作品の内容をより深く理解することが可能になる。</p> <p>最近、現代の作家はともかく、過去の地元出身の文学者について、土地の人々の知識や関心は薄れる傾向にある。したがってこの番組では、ともすれば忘れがちなそうした作家や作品も積極的に取</p> | <p>四国にゆかりのある文学を時代順に訪ねる旅の形式になぞらえて、各回のテーマは、上代から中世、近代、そして現代へと順に配列している。作品数の多い現代文学については、「四国出身の文学者」と「四国を舞台とした文学作品」の2グループに分け、それぞれ2回ずつ取りあげる。なお、正岡子規と夏目漱石については、いずれも1回のテーマとして独立に構成する。</p> <p>各回の内容は、たとえば『土佐日記』では、四国を離れるまで海路の故地を訪ね、それぞれ『日記』と文学碑などを対照させながら、</p> | <p>四国放送 (徳島県) 毎週日曜日 午前 6時30分) 午前 7時00分 平成2年 10月7日) 12月30日</p> <p>西日本放送 (香川県) 毎週土曜日 午後 6時30分) 午後 7時00分 平成2年 10月13日)</p> |

| | | | | |
|--|--|---|--|--|
| | | <p>りあげ、紹介するよう努めたい。</p> <p>その点、四国の各地には文学作品や作家にちなんだ、数々の文学碑や句碑がある。また、作家を記念する文学館も多い。そうした碑文や記念館を訪ねることにより、その作家への興味をさらに深めさせる。</p> <p>この講座のねらいは、こうした作品や作家の周辺を掘り起こすことにより、特定の文学作品の朗読や解釈や鑑賞だけにとどまらず、作品をとりまくその土地の風土、文化、人情、また、作家の生い立ちなど、地域と文学との深い関係についても多角的に解説し、文学の世界の豊かさと深さを理解し、その楽しさを味わう力をつけてもらうことにある。</p> | <p>作品を鑑賞する。『平家物語』では、平曲の演奏を聴きながら、作品の理解を深める。江戸時代の文学でも人形浄瑠璃を聴きながら、四国とのつながりを探る。</p> <p>現代の文学作品については、作品の朗読をはじめ、文学碑、記念館の紹介、作家の人物像の解明など、作品の内容を立体的にとらえられるよう構成に配慮する。たとえば大和田建樹の紹介には、彼が作詞した『鉄道唱歌』を聴くなど、それぞれ素材を生かす工夫をする。</p> <p>番組を聴いたあと、その作品や作家についてももっと知りたい、あるいは、舞台となったゆかりの場所を訪ねてみたい、といった気持ちを聴取者に持たせることが大切である。文学がもっと地域の生活文化の中に溶け込み、市民ひとりの体のなかに骨肉化するよう、ラジオの特性を十分生かした構成に留意する。</p> | 平成3年 1月5日 |
| | | | | 南海放送 (愛媛県) 毎週日曜日 午後 9時00分 } |
| | | | | 午後 9時30分 平成2年 10月14日 } |
| | | | | 平成3年 1月6日 |
| | | | | 高知放送 (高知県) 毎週日曜日 午前 8時05分 } |
| | | | | 午前 8時35分 平成2年 10月7日 } |
| | | | | 12月30日 |
| | | | | |

◎ 科目の構成

(テレビ科目) 未来をひらく生命科学—その基礎と応用

| 放 送 回 (月 日) | | | | | 中 心 テ マ | 各 回 の 内 容 | 担当講師等 |
|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|------------------|-------------------------|-------|
| 回 | 四国放送 (徳島県) | 西日本放送 (香川県) | 南海放送 (愛媛県) | 高知放送 (高知県) | | | |
| | | | | | | 生命科学は、非常に 広い領域を含んでいる | |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|--------------------------|---|--|
| 第 1 回 | 10月 6日 | 10月 7日 | 10月 6日 | 10月 6日 | 生命科学 諸論 とタン パク質 | <p>ので、すべてをカバーすることはできない。今回のプロジェクトでは、医学、薬学並びに生物工学を中心とすることになる。したがって、内容は、(1) 生物の基礎構造と基本的機能、(2) 人体の正常機能とその異常に基づく病態、(3) 生物の工業的利用法ということに限定することになる。特に、病態と工業的利用に関しては、近年問題となってきたトピックスを選択して解説する。第1回では、生命科学全般の概説とタンパク質の性質、役割について解説する。</p> | <p>徳島大学酵素科学研究センター 教授 勝沼 信彦</p> <p>徳島大学工学部 教授 松田 佳子</p> |
| 第 2 回 | 10月13日 | 10月14日 | 10月13日 | 10月13日 | 核酸と 遺伝 | <p>ニワトリの卵からは必ずニワトリが生じて、アヒルを生じることではない。このように親の特徴が子に伝わることを遺伝という。我々ヒトの親と子は、精子と卵によってつながる。その精子と卵の中には染色体が存在し、その中にはそれぞれの親の特徴を決める遺伝子がある。この遺伝子が受精によっていっしょになり、更に、分裂により子の体をつくるそれぞれの細胞に入っていくために、子は親に似るのである。遺伝子の本体はデオキシリボ核酸 (DNA) である。DNA 上の遺伝情報は RNA (リボ核酸) の働きのもとでタンパク質として具体的</p> | <p>徳島大学医療技術短期大学部 教授 大西 敏男</p> <p>徳島大学酵素科学研究センター 教授 蛸名 洋介</p> |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|----------|--|--|
| | | | | | | な姿をみせる。 | |
| 第 3 回 | 10月20日 | 10月21日 | 10月20日 | 10月20日 | 生体 機能 | <p>生物は、多くの種類の細胞から成り立ち、その相互作用によって生命活動を営んでいる。したがって、生体の物質が明確になっても、その集合である細胞や組織の構造機能が明らかにならなければ、生体の活動は理解できない。</p> <p>代謝とは、生体構成物質のスケジュールされた変化の経路を言い、二つの主な役割がある。全ての生体機能は、主に ATP をメデイエーターとするエネルギーによって行われている。したがって、代謝の第一の役割はエネルギーの産生を目的としたものである。次に、生体構成物質はたえず分解と合成が繰り返されており更新されている。したがって、第二の役割は生体物質の更新と必要物質を産生することに関与している。両者とも生体恒常性を保持すべく精密に調整されている。</p> | <p>徳島大学酵素科学研究センター教授 市原 明</p> <p>徳島大学酵素科学研究センター教授 勝沼 信彦</p> |
| | | | | | | <p>現在の日本は、“飽食の時代”といわれ、栄養欠乏症よりも摂取の過剰やアンバランスが問題となってきた。食生活の多様化と加工食品の増加、健康志向の高まりと、“健康”を売りものにした食品の氾濫は、消費者</p> | <p>徳島大学医学部教授 岸 恭一</p> |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|---------|---|--|
| 第 4 回 | 10月27日 | 10月28日 | 10月27日 | 10月27日 | 栄養と健康 | を混乱させている。栄養治療の面では経腸栄養法や静脈栄養法が進歩し、非経口的な完全栄養補給が可能となった。栄養は健康の維持・増進並びに疾病の予防・治療に欠くことができず、正しい知識による適切な栄養摂取が大切である。そこで健康に生きるための望ましい食生活について考える。 | 徳島大学医学部教授 森田 雄介 徳島大学総合科学部教授 野田 克彦 |
| 第 5 回 | 11月 3日 | 11月 4日 | 11月 3日 | 11月 3日 | 運動、睡眠環境 | ここでは、健康と関連しての運動、睡眠、そして環境の問題を取りあげる。人間は動物であり、日常的に動くことで生活を営み、同時に身体の機能を維持している。この身体活動の作用を身体の機能と健康の面から捉えて解説する。しかし、身体活動には必ず疲労が伴い、人間は休養を必要とするので疲労と休養にかかわりのある睡眠を取りあげる。運動と睡眠が身体の内部環境に関わる問題とすれば、健康に関わる大きな問題として外部環境がある。これについて保健衛生的な面から分析する。 | 徳島大学教養部教授 小原 繁 徳島大学医学部教授 森田 雄介 徳島大学医学部教授 三好 保 |
| | | | | | | 高齢化社会を迎え、健康に老いることが、医学的及び社会的に重要な問題となっている。特に、加齢に伴う身体活動の低下は著しく、それに対応した生 | 徳島大学歯学部教授 若野 洋一 |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|----------|--|---|
| 第 6 回 | 11月10日 | 11月11日 | 11月10日 | 11月10日 | 老 化 | <p>活環境の重要性が強調されている。ここでは加齢に伴う歯及び骨の老化をはじめ脳卒中や心筋梗塞の発生に直接関係ある血管の老化、更に、脳機能の老化、すなわち脳神経細胞の機能低下と細胞壊死に関するアルツハイマー型老人痴呆について、それぞれ解説する。</p> | <p>徳島大学医学部 教授 岸野 泰雄</p> <p>徳島大学酵素科 学研究センター 教授 勝沼 信彦</p> |
| 第 7 回 | 11月17日 | 11月18日 | 11月17日 | 11月17日 | 免疫 異常 | <p>免疫機構とは、非自己を排除し生体の恒常性を維持する生命機構のことである。基本的には抗原と、それに対して誘導される抗体や種々の液性因子、リンパ球などの細胞性因子の相互反応で構成されている。ここではまず、免疫のしくみと異常を解説し、次いで代表的な疾患として身体の構成成分（自己）に対する免疫異常症である自己免疫疾患と外来抗原（異物）に対するアレルギー疾患を紹介、最後に、ウィルス感染によって一部のリンパ球が破壊されて起こるエイズ（後天性免疫不全症候群）について、ウィルスの性状や伝播様式を解説する。</p> | <p>徳島大学医学部 教授 小倉 剛</p> <p>徳島大学医学部 教授 内田 孝宏</p> |
| | | | | | | <p>放射線、化学物質、ウィルスなどの作用により遺伝子が阻害されると、正常細胞は癌細胞に変化する。この過程には、正常細胞の遺伝子に組み込まれている癌遺伝子の活性化</p> | |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|-------------------|--|--|
| 第 8 回 | 11月24日 | 11月25日 | 11月24日 | 11月24日 | 癌 | や、癌抑制遺伝子の不活性化が関与すると考えられている。また、癌細胞が転移したり、化学療法剤に抵抗性を獲得するようになる過程も、遺伝子レベルで解明されようとしている。これらの問題をウィルス発癌の代表例である成人T細胞白血病や、近年、発生率や死亡率が上昇している肺癌を例に、生命科学の立場から解説する。 | 徳島大学医学部 教授 斎藤 史郎 徳島大学医学部 教授 小倉 剛 |
| 第 9 回 | 12月 1日 | 12月 2日 | 12月 1日 | 12月 1日 | 診断と 治療の 最先端 | 病気の診断と治療をめぐる二つの最新の話題を取りあげる。一つは遺伝子診断と治療であり、もう一つは臓器移植である。まず、遺伝子工学的手法によってヒトの遺伝子の異常を見いだしたり、治したりする遺伝子診断と遺伝子治療について述べる。次に、臓器を取り替えることによって病気の治療する臓器移植について解説する。1980年頃、臓器移植に不可欠な免疫抑制剤であるサイクロスポリンが導入されてから、移植の数は増え、成績も著しく向上した。そこで、この方面の現況を述べ、その将来を展望する。 | 徳島大学医学部 教授 黒田 泰弘 徳島大学医学部 教授 古味 信彦 |
| | | | | | | まず、第10回から第12回までの3回の講義の主題である産業と生命科学の関係について概説する。ついで、生 | |

| | | | | | | | |
|--------------|--------|--------|--------|--------|------------------------|---|--|
| 第 10 回 | 12月 8日 | 12月 9日 | 12月 8日 | 12月 8日 | 医薬品 と新素 材 | <p>物系に作用して生理性をもたらし生理活性物質の中で人体との関係が深い医薬品について、その作用の仕組み、生体内での挙動、新しいくすりの開発のプロセス及び工場での生産のありさまなどについて解説する。更に、歯や骨などのように、生体で機械的な役割を持つ硬組織の代替には、生体内で安定的な人口材料が求められている。これに用いる新素材についても解説する。</p> | <p>徳島大学工学部 教授 太田 忠甫</p> <p>徳島大学薬学部 教授 寺田 弘</p> <p>徳島大学歯学部 教授 桑山 則彦</p> |
| 第 11 回 | 12月15日 | 12月16日 | 12月15日 | 12月15日 | 有用生 物の開 発と利 用 | <p>生命科学の産業としての利用は、医学や薬学の分野のみならず、我々の食料を供給する農学分野においても盛んである。特に、最近のバイオテクノロジー技術は有用微生物、栽培植物及び水畜産物を対象に多様な利用が試みられている。例えば、食品・医薬品その他の有用物質生産に用いられる微生物への新たな機能の賦与が可能であり、また、主要穀類など栽培植物では、細胞・組織培養や、それからの固体再生を行うことにより、優良な性質を持つ品種を作り出すことができる。ここではこれらの細胞工学的技術や生命科学の農学分野における利用の現状について解説する。</p> | <p>神戸大学農学部 助教授 眞山 滋志</p> <p>香川大学農学部 教授 桑原 正章</p> |

| | | | | | | | |
|--------------|--------|--------|--------|--------|--------------|--|---|
| 第 12 回 | 12月22日 | 12月23日 | 12月22日 | 12月22日 | エネルギー資源と環境 | <p>石油、石炭、天然ガス等の化石資源は、いつかは枯渇する。それに代わるエネルギー資源として、再生産の可能なバイオマスに多大の関心が寄せられている。将来のエネルギー問題解決に向けてバイオテクノロジーを駆使し、トウモロコシやキャッサバなどのデンプンから、また、木質バイオマスであるセルロースからエタノールを生産する基礎研究が進められている。</p> <p>植物の光合成をまねた人工光合成による光エネルギー変換は、同時に、地球上で増え続ける二酸化炭素の化学変換、地球環境浄化、温暖化の防止にも重要な役割を担っている。</p> | <p>徳島大学工学部教授 金品 昌志</p> <p>徳島大学工学部教授 太田 忠甫</p> <p>香川大学農学部教授 桑原 正章</p> |
| 第 13 回 | 12月29日 | 12月30日 | 12月29日 | 12月29日 | 「生命科学の未来と課題」 | <p>1960年代後半に始まった生命科学の爆発的な進歩はすでに見たように、生命の基礎理論、医学、医療、工学、農業など、さまざまな分野で予想以上の成果を上げた。特に、現代医療技術における進歩はめざましい。しかし、その成果によって私たちは、脳死、臓器移植、受精卵の扱い、胎児診断、遺伝子治療など、人間の生と死の問題をめぐる「生命倫理」という新たな課題を背負うことになった。最終回では生命科学研究の評価と未来像、更に、生命倫理をめぐる社会</p> | <p>徳島大学総合科学部教授 高瀬 昭治</p> <p>徳島大学酵素科学研究センター教授 勝沼 信彦</p> <p>徳島大学医学部教授 斎藤 隆雄</p> |

| | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|-----------------------------|--|
| | | | | | | 的合意の形成という、思想的な課題にも踏み込んで考える。 | |
|--|--|--|--|--|--|-----------------------------|--|

(ラジオ) 四国の文学

| 放 送 回 (月 日) | | | | | 中 心 テーマ | 各 回 の 内 容 | 担当講師等 |
|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|------------|--|---|
| 回 | 四国放送 (徳島県) | 西日本放送 (香川県) | 南海放送 (愛媛県) | 高知放送 (高知県) | | | |
| 第 1 回 | 10月 7日 | 10月13日 | 10月 1日 | 10月 7日 | 旅立ち | <p>四国にゆかりのある文学を記紀万葉から現代作家までを取りあげ概観する。通いなれた道の辺にある碑を誰のものか知らずに通り過ぎることも多い。そうした文学碑を訪ねる。</p> <p>ゆかりの地に立ち、あらためて作品を読み、文学を身近なものとし、親しんでゆきたい。この作家が四国の生まれと始めて知り、また、作品の舞台が住んでいる町であったり、新たな発見がある。私たちは四国に関わる文学を訪ねてここに旅立ちをする。</p> | <p>徳島大学総合科学部 教授 本多 浩</p> <p>徳島大学総合科学部 教授 仙波 光明</p> <p>徳島大学教養部 助教授 中川 博夫</p> |
| 第 2 回 | 10月14日 | 10月20日 | 10月 8日 | 10月14日 | 記紀万葉と四国 | <p>まず、『万葉集』に見える四国の歌枕（和歌に詠まれた地名）を取りあげる。ここでは、阿波への道の意の淡路も含めて、四国各地の歌枕について、その歌を鑑賞しつつ探訪する。また、『万葉集』に詠まれ、『古事記』、『日本書紀』等に語られている、貴人の流離の物語（貴種流離譚）の中から四国に関係する作品を紹介し、味読する。</p> | 同 上 |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|--------------------|--|---|
| 第 3 回 | 10月21日 | 10月27日 | 10月15日 | 10月21日 | 『土 佐 日記』 の四国 | 紀貴之が任国土佐を 後にして帰洛の途につ くべく門出したのは今 から一千五十余年前の 旧暦十二月二十日のこ とであった。この日か ら都へ着くまでの五十 五日間の行程を毎日書 き記すという形で綴ら れたのが『土佐日記』 である。この回は、一 行が土佐泊を後にする までの、三十九日間の 記事の内から文学碑の 残されている所を中心 に鑑賞しながら、南国 市の紀氏旧邸、大津町 船戸、奈半利町、室戸 市、穴喰町、鳴門市土 佐泊各地を訪れる予 定。 | 同 上 |
| 第 4 回 | 10月28日 | 11月 3日 | 10月22日 | 10月28日 | 『平 家 物語』 と四国 | 『平家物語』は主とし て治承・寿永の内乱の 経緯を、平氏の栄光と 滅亡という視点から描 いた物語と言える。本 物語が平曲という形で 琵琶法師の語りにより 全国に広められたこ と、その戦乱が関東以 西を呑みこむ大規模な ものだったことなどの 理由によって、今なお 各地に数多くの史跡を 伝えている。この時間 では、四国に関わる話 の中より屋島の合戦及 び小宰相の悲劇を取り あげ、物語の持つ勇壮 と悲哀の両面に触れて みたい。 | 徳島大学総合科 学部 教授 本多 浩 徳島大学総合科 学部 助教授 仙波 光明 徳島大学教養部 助教授 中川 博夫 |
| | | | | | | 歌聖とも称される西 行は、仁安三年(1168、 一説前年)、修行のた め、五十一歳で中国路 | |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|------------------------|---|-----|
| 第 5 回 | 11月 4日 | 11月10日 | 10月29日 | 11月 4日 | 西行の 四国 | を下り、四国行脚に出る。保元の乱後讃岐に配されて松山に崩じた旧主崇徳院の御陵参拝と、崇敬する弘法大師聖蹟巡礼が主な目的であった。その足跡を辿りつつ、当地における西行の詠作を鑑賞する。また、その崇徳院や、承久の乱後土佐に配されて阿波に崩じた作品を読み、白峯御陵・池谷御陵（現火葬塚）を訪ねる。 | 同 上 |
| 第 6 回 | 11月11日 | 11月17日 | 11月 5日 | 11月11日 | 江戸時 代の文 学と四 国 | <p>上方の人々にとって四国とはまず阿波を意味したらしい。中でも鳴門はしばしば文学作品の中に登場する。今回は、『西鶴名残の友』から『入日の鳴門浪の紅ゐ』を読みながら、あま塚(清少納言伝説)等を訪ねる。次に浄瑠璃『傾城阿波鳴門』に登場する阿波十郎兵衛の屋敷と周辺の文学碑を見て、ついでに徳島市寺町に足をのばし、『夕霧阿波鳴門』夕霧の墓も見ておこう。</p> <p>後半は、浄瑠璃作者でもあった平賀源内旧邸と源内の墓を讃岐志度町に訪ね、『神霊矢口渡』、『放屁論』を紹介する。</p> | 同 上 |
| | | | | | | 四国出身の文学者を取りあげ、その人と作品を解説。朗読を入れて作品を鑑賞する。また、ゆかりの地、文学碑、文学館などを訪ねる。 | |

| | | | | | | | |
|-------------|--------|--------|--------|--------|----------------|--|--|
| 第 7 回 | 11月18日 | 11月24日 | 11月12日 | 11月18日 | 四国出身の文学者 I | <p>(徳島県)</p> <p>戦前の空想科学小説を書いた海野十三、『桂春団治』等異色の作品を書いた富士正晴、神戸生まれではあるが徳島育ちの賀川豊彦、現在活躍中の瀬戸内寂聴(晴美)、東京オリンピックの歌を作った野上彰を取りあげる。</p> <p>(香川県)</p> <p>菊池寛、『天の夕顔』で評判となった中河与一、壺井繁治、壺井栄、プロレタリア作家の黒島伝治、明治大正時代の登山家で紀行随筆を書いた小島鳥水等を取りあげる。</p> | <p>徳島大学総合科学部 教授 本多 浩</p> <p>徳島大学総合科学部 助教授 仙波 光明</p> <p>徳島大学教養部 助教授 中川 博夫</p> |
| 第 8 回 | 11月25日 | 12月 1日 | 11月19日 | 11月25日 | 四国出身の文学者 II | <p>四国出身の文学者を取りあげ、その人と作品を解説。朗読を入れて作品を鑑賞する。また、ゆかりの地、文学碑、文学館などを訪ねる。</p> <p>(愛媛県)</p> <p>明治時代の科学的冒険小説作家押川春浪、『鉄道唱歌』の作詞者でもある紀行文学作家大和田建樹、政治小説を書いた末広鉄腸、須藤南翠、ダダ詩人高橋新吉、戦後世代の第一人者大江健三郎等を取りあげる。</p> <p>(高知県)</p> <p>安岡章太郎、大原富枝、倉橋由美子、宮尾登美子と現在活</p> | 同 上 |

| | | | | | | | |
|--------------|--------|--------|--------|--------|-----------|--|---|
| | | | | | | 躍している作家、上林暁、浜本治、田岡典夫、また、明治時代の黒岩涙香、田岡嶺雲、大町桂月等を取りあげる。 | |
| 第 9 回 | 12月 2日 | 12月 8日 | 11月26日 | 12月 2日 | 正岡子規と俳人たち | 正岡子規は慶応三年(1867年)松山で生まれ『ホトトギス』を発刊、子規のもとには同郷の高浜虚子、河東碧梧桐らが集まった。松山は俳句の王国である。内藤鳴雪、中村草田男、石田波郷、寒川鼠骨らも愛媛の出身である。その人となり解説、作品を鑑賞する。また、子規を中心とした四国の俳人、また、四国に足を踏み入れた山頭火、尾崎放哉らも紹介する。なお、子規記念博物館を訪ねる予定。 | 同 上 |
| 第 10 回 | 12月 9日 | 12月15日 | 12月 3日 | 12月 9日 | 松山の夏目漱石 | 夏目漱石は明治二十八年、愛媛県尋常中学(松山中学)に英語の教師として赴任する。一年間という短い時であったが、不可解な人生を根源から究めようとした。帰郷した正岡子規を迎え俳句に親しんだ。三十九年『ホトトギス』に発表した『坊ちゃん』は松山在住時代の経験をもとにして描かれた。松山在住時代を中心に、その人となりを考え『坊ちゃん』を解説、鑑賞する。 | 徳島大学総合科学部 本多 浩 徳島大学総合科学部 助教授 仙波 光明 徳島大学教養部 助教授 中川 博夫 |
| | | | | | | 四国を舞台とした文学作品を取りあげ朗読し、解説、鑑賞する。 | |

| | | | | | | | | |
|--------------|--------|--------|--------|--------|--------------------------------|---|---|---|
| 第 11 回 | 12月16日 | 12月22日 | 12月10日 | 12月16日 | 四国を 舞台と した文 学作品 I | また、舞台となった場 所を訪ねる。 (徳島県) 宇野千代『人形師 天狗屋久吉』、林芙美 子『放浪記』、モラエ ス『潮音寺のごみ 溜』、吉川英治『鳴門 秘帖』、大木惇夫『阿 波の春』 (香川県) 志賀直哉『暗夜行 路』、島木赤彦『生活 の探求』、宮本百合子 『琴平』 | 同 | 上 |
| 第 12 回 | 12月23日 | 12月29日 | 12月17日 | 12月23日 | 四国を 舞台と した文 学作品 II | 四国を舞台とした文 学作品を取りあげ朗読 し、解説、鑑賞する。 また、舞台となった場 所を訪ねる。 (愛媛県) 国木田独歩『忘れ えぬ人々』、獅子文六 『大番』、丹羽文雄『南 国抄』、島崎藤村『哀 歌』 (高知県) 田宮虎彦『足摺 岬』、井伏鱒二『ジョ ン万次郎漂流記』 | 同 | 上 |
| 第 13 回 | 12月30日 | 1月 5日 | 12月24日 | 12月30日 | 旅を終 えて | 前回までに取りあげ られなかった作品、作 家について紹介。四国 に関わる文学をまとめ る。記紀万葉の時代は 勿論、明治以後の作品 の舞台となった場所も その変貌ははげしい。 しかし、いかに変貌し ても作品は私たちの心 の中で生きつづけてい る。古今東西、時代を 超え、文学は永遠に私 たちに呼びかけてくれ る。四国に関わる文学 | 同 | 上 |

| | | | | | | |
|--|--|--|--|--|---------|--|
| | | | | | の旅を終える。 | |
|--|--|--|--|--|---------|--|

◎ 受講生の募集等

テレビ講座 914名

ラジオ講座 693名

◎ スクーリング

下表のとおり実施した。

受講生には、実施の20日前に出席を促すための案内通知を行った。

| 会 場 | | 日 時 | |
|-------|-------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 県 | 場 所 | テレビ科目 | ラジオ科目 |
| 徳 島 県 | 徳 島 大 学 | 平成3年1月27日(日) 13:00～15:00 | 平成3年1月27日(日) 15:40～17:00 |
| | 鳴 門 教 育 大 学 | 平成3年2月3日(日) 13:00～15:00 | 平成3年2月3日(日) 15:40～17:00 |
| 香 川 県 | 香 川 大 学 | 平成3年1月27日(日) 13:00～15:00 | 平成3年1月27日(日) 15:40～17:00 |
| | 香 川 医 科 大 学 | 平成3年2月3日(日) 13:00～15:00 | 平成3年2月3日(日) 15:40～17:00 |
| 愛 媛 県 | 愛 媛 大 学 | 平成3年1月27日(日) 13:00～15:00 | 平成3年1月27日(日) 15:40～17:00 |
| | 新居浜工業高等専門学校 | 平成3年2月3日(日) 13:00～15:00 | 平成3年2月3日(日) 15:40～17:00 |
| 高 知 県 | 高 知 大 学 | 平成3年2月3日(日) 13:00～15:00 | 平成3年2月3日(日) 15:40～17:00 |

◎ 再視聴（聴取）

① テレビ科目……未来をひらく生命科学 ―その基礎と応用―

② ラジオ科目……四国の文学

| 実 施 場 所 | | 実 施 日 時 | | |
|---------|------|--|--|--|
| 県 | 場 所 | 第 1 回 | 第 2 回 | 第 3 回 |
| 徳島県 | 徳島大学 | 平成2年11月4日(日) テレビ科目 ① 13:00～13:45 ② 13:50～14:35 ③ 14:40～15:25 ④ 15:30～16:15 ラジオ科目 ① 13:00～13:30 ② 13:35～14:05 ③ 14:10～14:40 ④ 14:45～15:15 | 平成2年12月2日(日) テレビ科目 ⑤ 13:00～13:45 ⑥ 13:50～14:35 ⑦ 14:40～15:25 ⑧ 15:30～16:15 ラジオ科目 ⑤ 13:00～13:30 ⑥ 13:35～14:05 ⑦ 14:10～14:40 ⑧ 14:45～15:15 | 平成3年1月20日(日) テレビ科目 ⑨ 13:00～13:45 ⑩ 13:50～14:35 ⑪ 14:40～15:25 ⑫ 15:30～16:15 ⑬ 16:20～17:05 ラジオ科目 ⑨ 13:00～13:30 ⑩ 13:35～14:05 ⑪ 14:10～14:40 ⑫ 14:45～15:15 ⑬ 15:20～15:50 |
| 香川県 | 香川大学 | | | |
| 愛媛県 | 愛媛大学 | | | |
| 高知県 | 高知大学 | | | |